

2022年1月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、東シベリア東部で顕著な正偏差、日本の東海上で負偏差となったほか、北米～ヨーロッパ～ユーラシア大陸南部で波列パターンが卓越し、カナダ東部で負偏差、北大西洋中緯度帯で正偏差が見られた。200hPa 風速をみると、北アフリカ～ユーラシア大陸上の亜熱帯ジェット気流は蛇行が明瞭だった。偏西風は平年の位置と比べて、北太平洋では南偏し、北大西洋では北偏した。海面気圧をみると、ベーリング海峡付近で正偏差、アリューシヤンの南で負偏差が見られ、アリューシヤン低気圧は平年の位置と比べて南寄りであった。また、北大西洋中緯度帯で海面気圧の正偏差、バレンツ海～ロシア西部、中央アジアで負偏差が見られた。850hPa 気温をみると、シベリアの広い範囲で高温偏差、北米北部で低温偏差となった。

対流活動は、平年と比べて、南インド洋熱帯域の西部、南太平洋熱帯域の日付変更線付近で活発、インド洋熱帯域の東部、太平洋赤道域の日付変更線付近で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相の東進は不明瞭だった。対流圏上層では、南太平洋熱帯域の中部～東部で低気圧性循環偏差となった。北大西洋～ユーラシア大陸南部では波列パターンが卓越し、アラビア半島付近で高気圧性循環偏差、中国南部で低気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、オーストラリア～メラネシア付近で低気圧性循環偏差となっ

た。海面気圧は、赤道域では、太平洋の中部～東部で正偏差、インド洋で負偏差となった。南方振動指数は+0.3だった。

世界の天候

+0.28℃（速報値）で、1891年の統計開始以降、1月として6番目に高い値となった。1月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.79℃/100年（速報値）である。

主な異常天候発生地域は次のとおり。

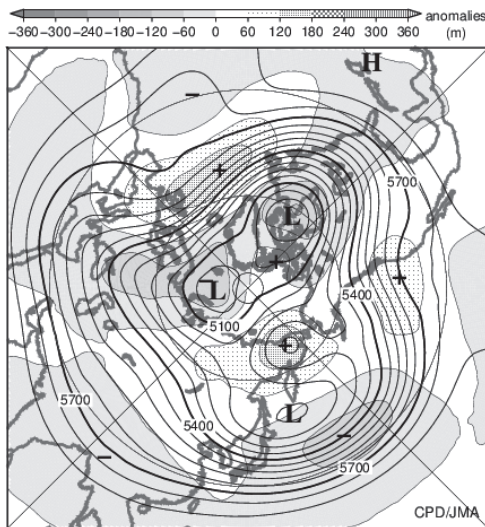
- セネガル、パラグアイ～アルゼンチン中部、オーストラリア南東部で異常高温となった。
- 南アジア北西部、中央アジア南部、カザフスタン西部、ロシア南西部及びその周辺、トルコ中部で異常多雨、東シベリア北東部、ヨーロッパ中部～北アフリカ北西部、米国北東部～中部、米国西部で異常少雨となった。

（気象庁 大気海洋部 気候情報課）

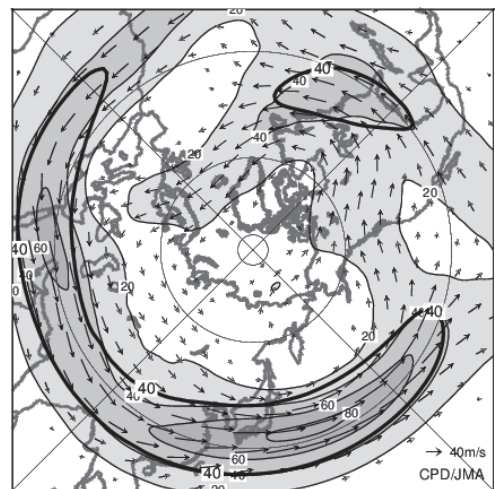
※ 特に断りのない限り、1991～2020年平均値を気候平均値として記述しています。

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

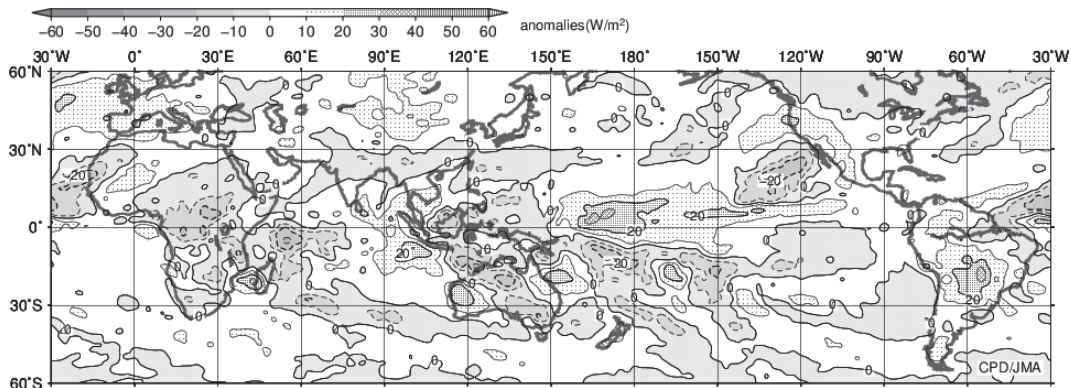
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/diag/sokuho/index.html>



2022年1月の北半球月平均500hPa 高度及び
 年偏差
 等値線間隔は60m。陰影は年偏差。年偏差は
 1991～2020年の平均値。

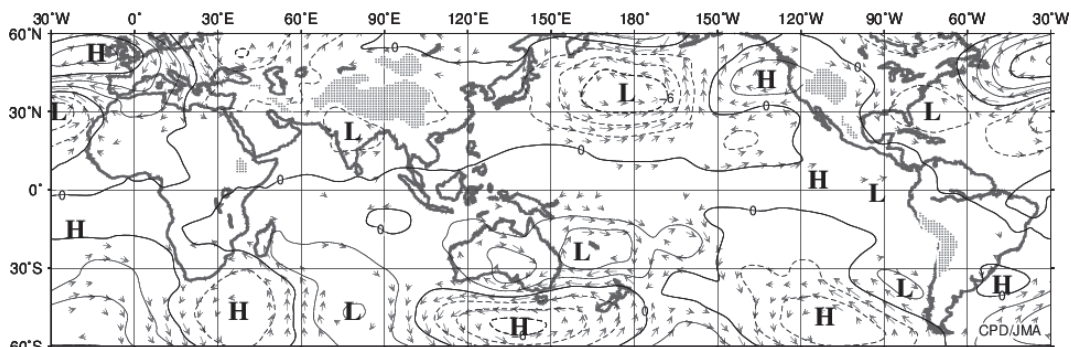


2022年1月の北半球月平均200hPa 風速及び
 風ベクトル
 等値線間隔は20m/s。太実線は平年の風速で等値
 線間隔は40m/s。年偏差は1991～2020年の平均値。



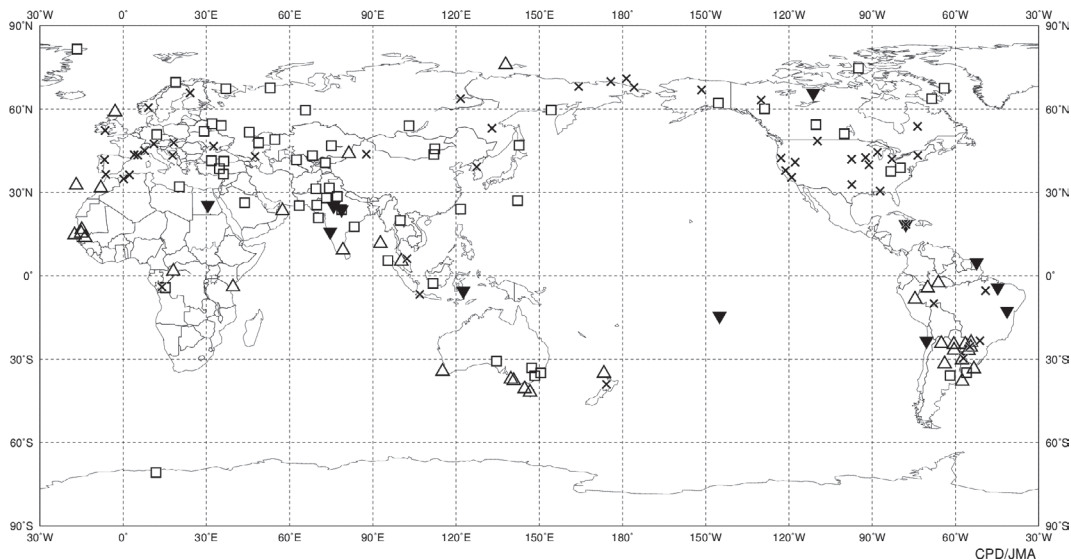
2022年1月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁（NOAA）より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1991～2020年の平均値。



2022年1月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1991～2020年の平均値。



2022年1月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。